



● 建築思想

生物学用語：新陳代謝

“メタボリズム建築”

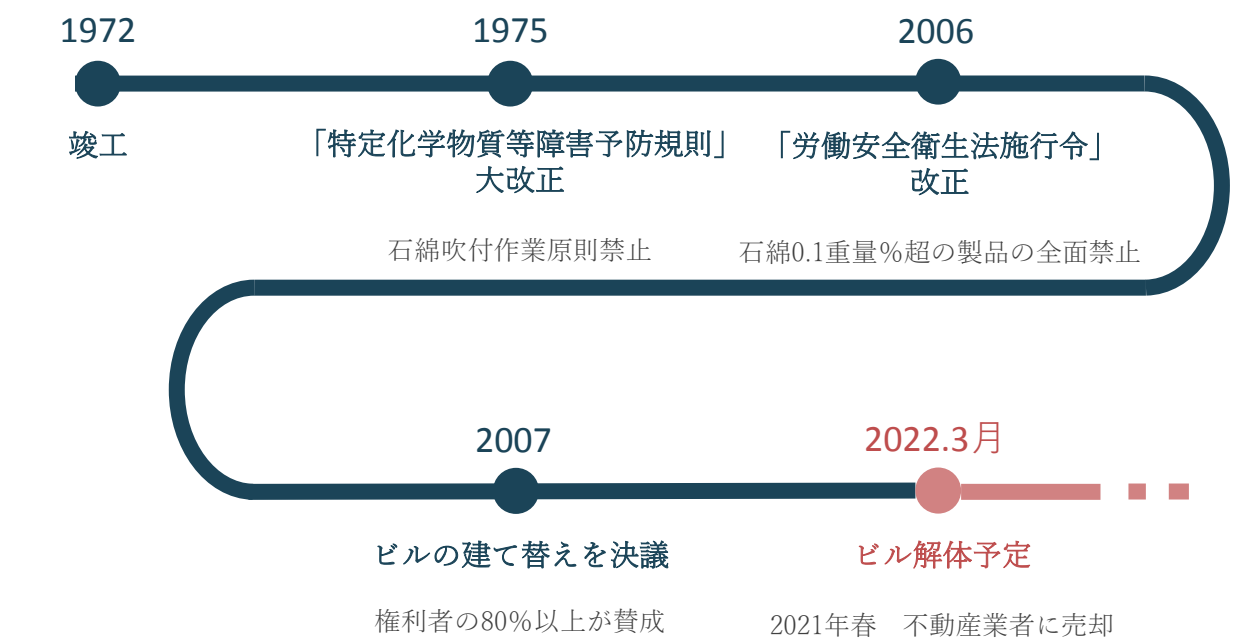
マニフェスト『METABOLISM/1960』にて、建築物は**可変性**や**増築性**に対応したものであるべきであると提案される

“時間軸と未来志向を持った建築”

現在において造られる建築物は、**過去現在未来の時間軸**を意識するべきである。

しかし、中銀はメタボリズムしない。

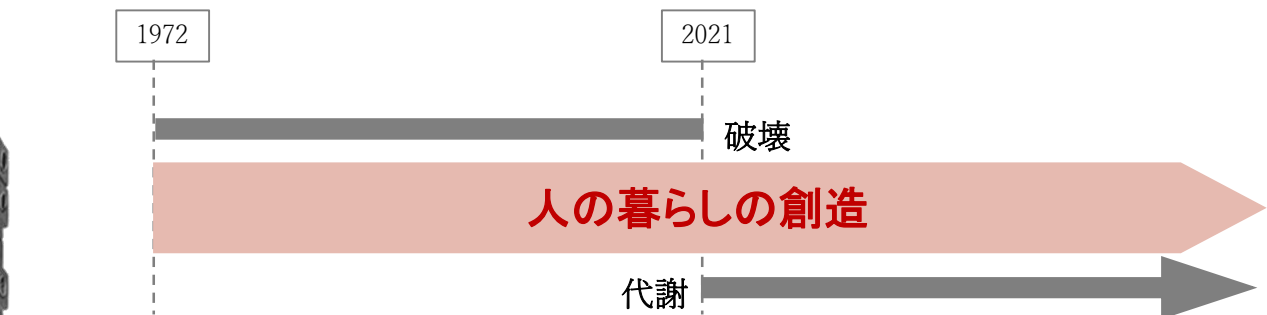
● 破壊



2022年3月、中銀カプセルタワービルは老朽化に伴う安全性の問題やアスベストが使用されていることによる健康問題を原因に代謝不全のままその命を終える。

● 中銀的メタボリズムと核

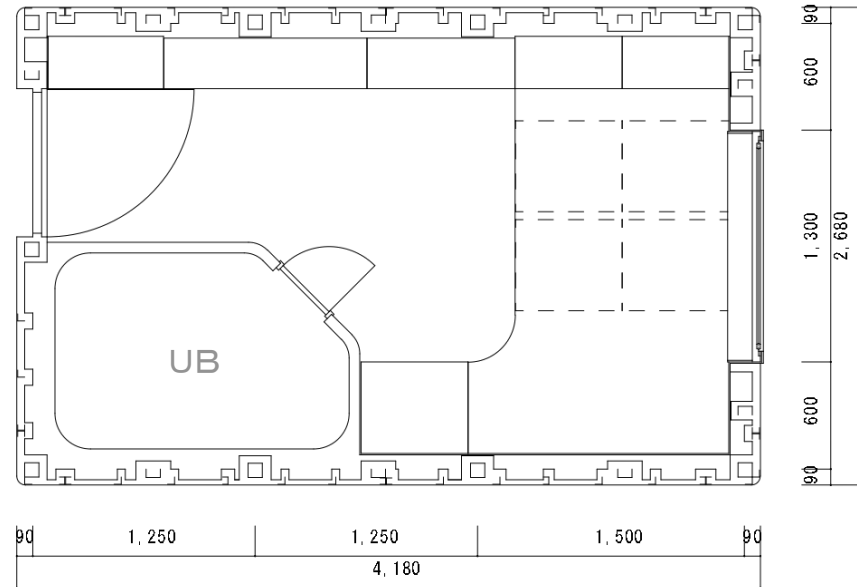
中銀カプセルタワービルは人の暮らしについての考察し抜かれ造られた末の結晶的建物である。



“人々の暮らしを未来志向を持ち考えること”
これを核に、2021年現在における中銀カプセルタワービルの姿を再考する

● 中銀カプセルタワービル概要

所在地：東京都中央区銀座8-16-10
設計：黒川紀章
構造：鉄骨鉄筋コンクリート、一部鉄骨造
地下1階・地上13階および11階
戸数：140戸（＝カプセルの数）
工期：1971年4月～1972年3月
敷地面積：441.89㎡
建築面積：429.51㎡
延床面積：3091.23㎡



カプセル平面図



出典 メディア・モンスター：誰が「黒川紀章」を殺したのか？/曲沼美恵
行動建築論 メタボリズムの美学/黒川紀章
中銀カプセルタワービルパンフレット

● “住まう人々”についての分析 個人化

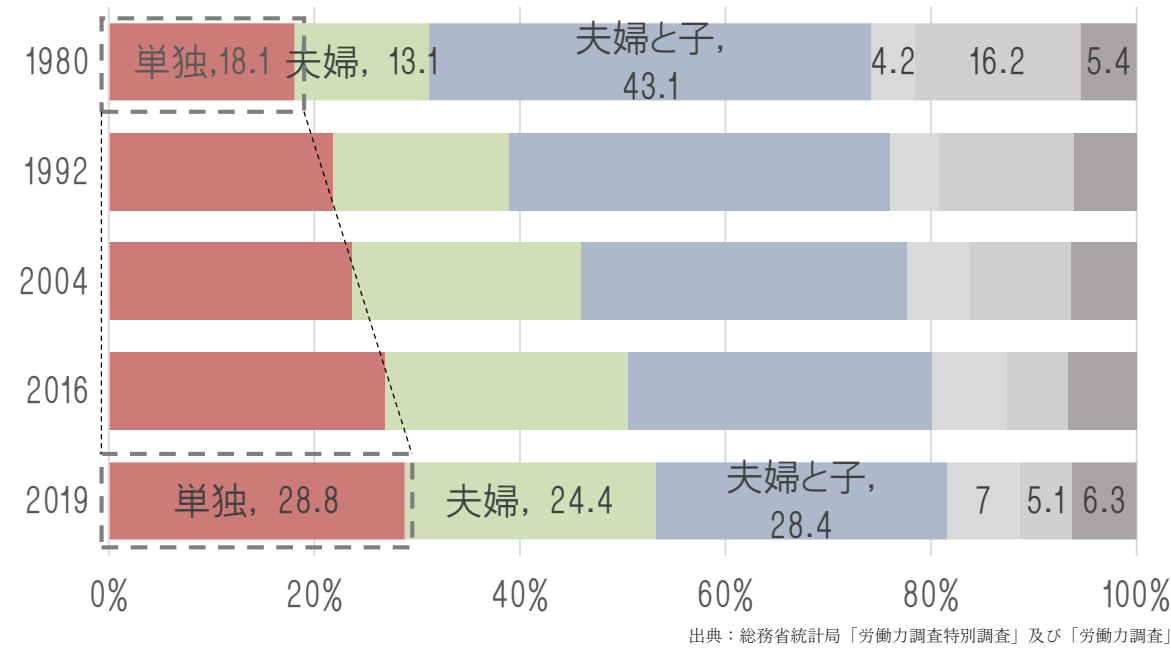
社会学では 「個人は個人化を強めている」と言われている。

“個人化の強まり”

- a. 世帯分布的な個人化
- b. 個人の人格面での個人化

a. 世帯分布的な個人化の強まり

単独世帯は、中銀カプセルタワー建設頃の1980年から2019年の約30年で世帯構成の中で一番高い割合に。



1980年
単独者 = 43.1%
夫婦のみ = 18.1%
夫婦と子 = 13.1%



2019年
単独者 = 28.8%
夫婦のみ = 24.4%
夫婦と子 = 28.4%

b. 個人の人格面での個人化

要因① 家族や地域コミュニティの解体

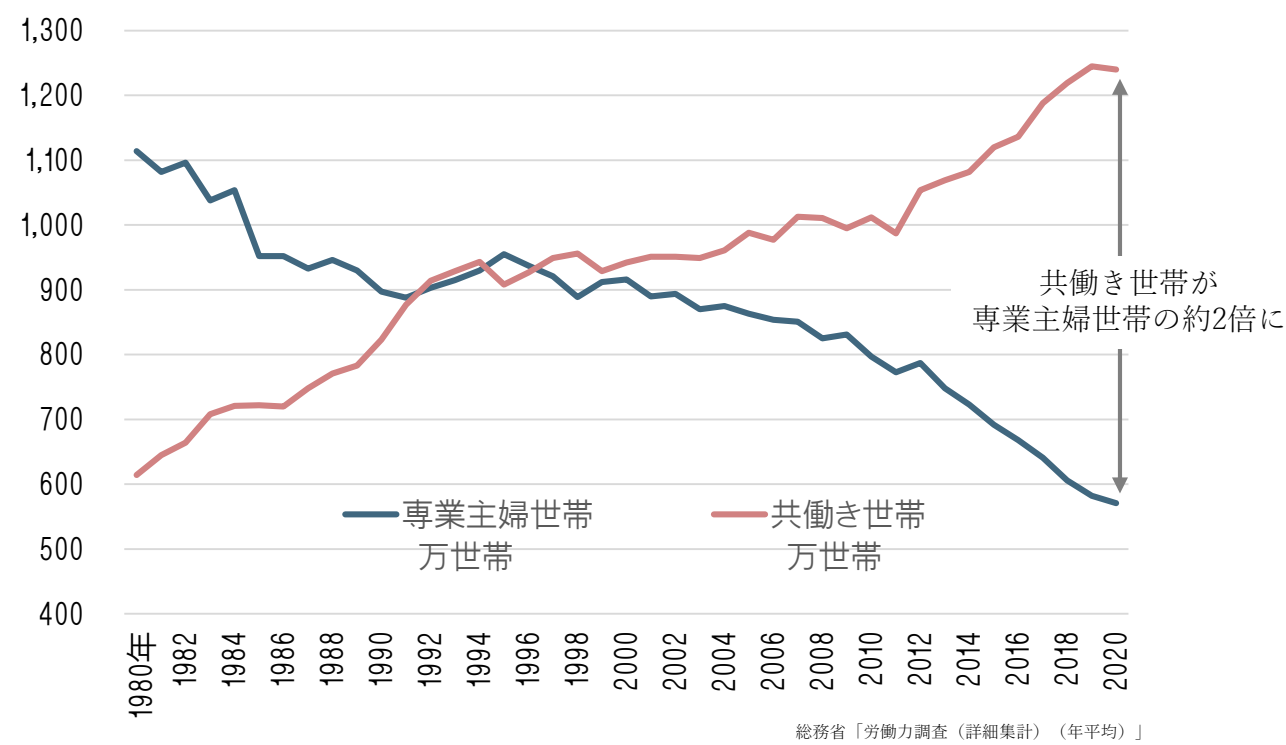
個人の生活ネットワークが地縁・血縁・婚姻関係だけにとらわれなくなる。自立化した個人と個人では、多様な関係が築かれるように。

→単独世帯の増加は人々が、多様な関係を持つことの可能性が強まったことの表れとして考えることができる。

要因② 女性の社会進出

社会進出は女性に経済的な基盤を与えた。夫婦の関係は依存し合うものから互いにアイデンティティを確固した関係へ。

→家族という密接な関係の中でも個人はより存在感を強める。個人の色の強まりは各家族の出す色の強まりにも影響を及ぼす。



● “住まい”についての分析 nLDKの間取り

nLDK＝

n<個室>+LDK<リビングダイニングキッチン>

nLDKという間取りは住まいの定型である。個人の空間となる個室nは単に居室数を表す数字であり、LDKを中央に添え物的位置に成り立つ。



間取りの主役リビングは居室としての目的が曖昧。リビングで家族が仲良く集う姿が描かれるごとに、仲良く集まらなければというが“脅迫感”を生む。



参考：三井不動産レジデンシャル

住まい手、家族は必ずしも血縁や男女の夫婦関係ではない。しかし、漠然と抱かれる家族像は固定され続けている。変化する住まい手とnLDKには“ずれ”が生じている。

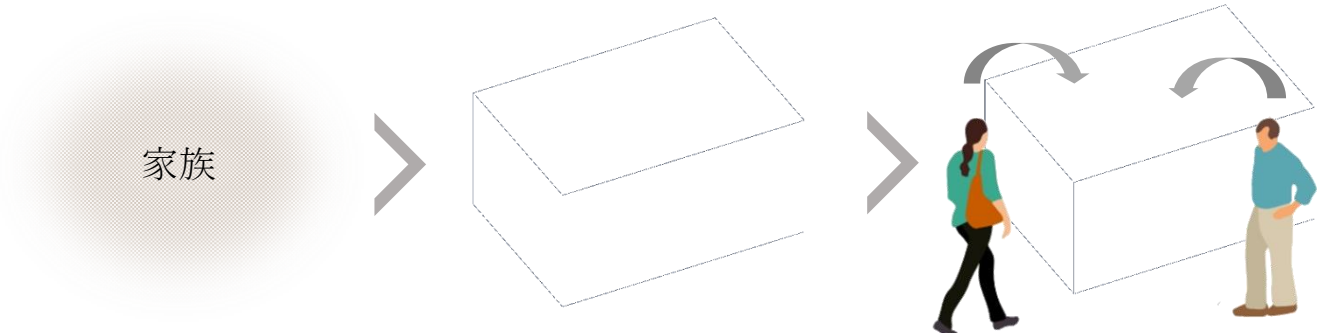


“家族”で検索…
1ページ目は、
子連れ夫婦の写真で埋まる

● “住まい”についての分析 家族とは

家族の形成過程

× 家族という枠が先に定義され、個が配置されていく。

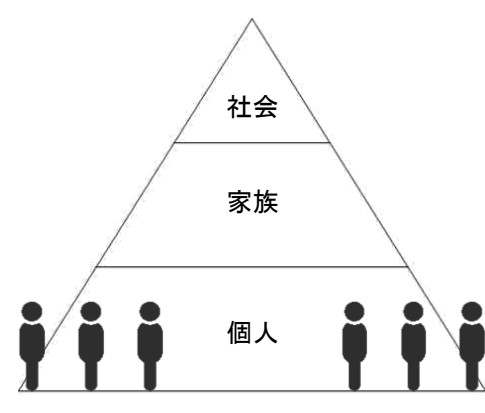


○ 個が集う人たちの関係を家族と呼ぶ

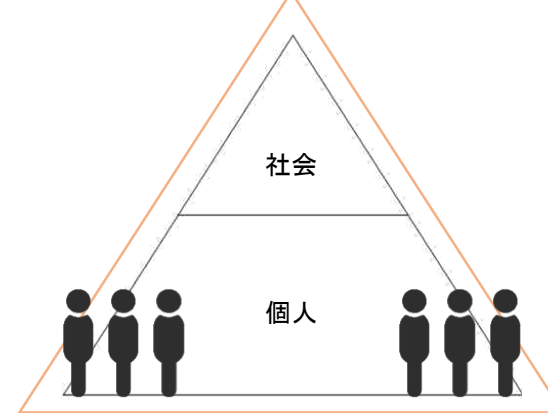


個人は直接社会を構成している。

社会の構成ヒエラルキーの中で家族の段階を間に挟んでしまいがちである。しかし、現在の日本において個の個人化は強まり、人々を安易に家族という単語で括ることはできない。個を個として捉えることの重要度は高い。

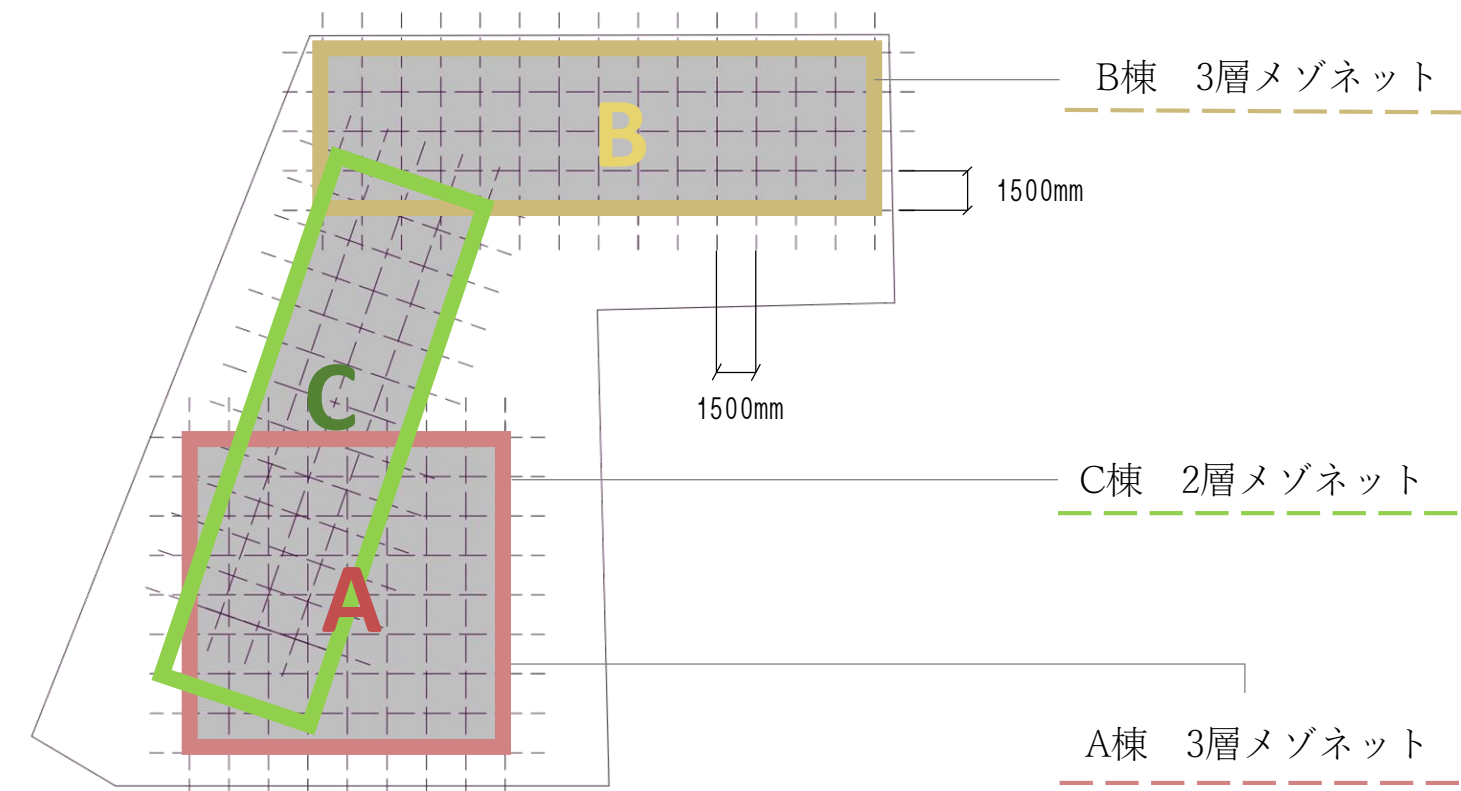


社会－家族－個人



社会－個人

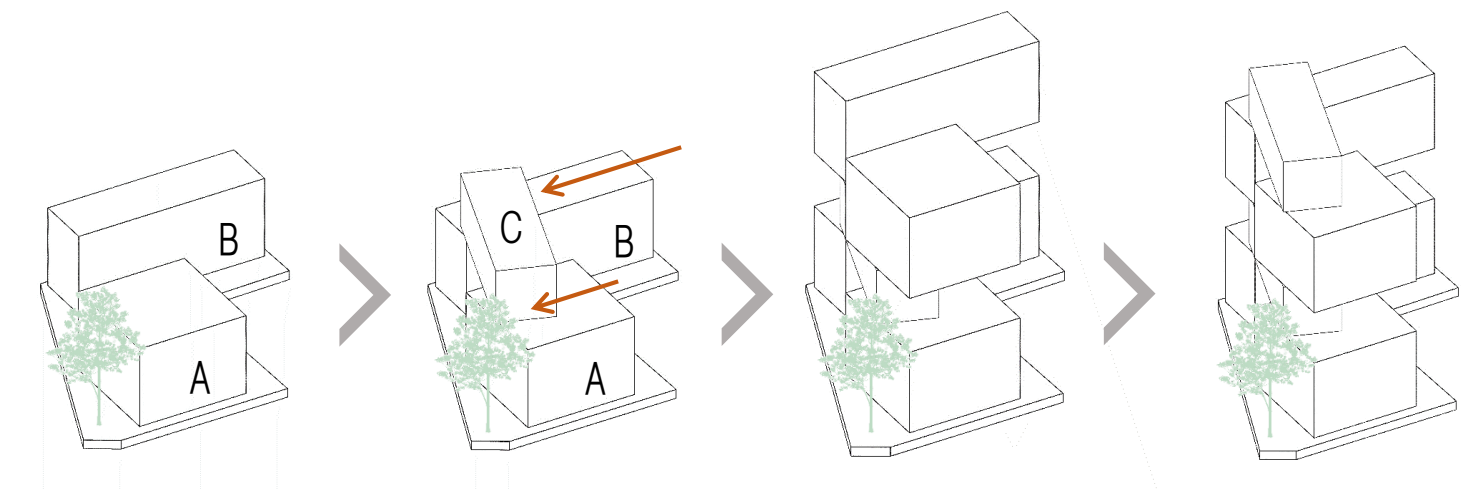
● “住まう”の提案 設計概要



- 手軽さは自由への近道である。まっさらな土地に居住者の自由に間取りを形成する。確かに自由だが、ルールがない場所に間取りを形成するのはなかなか難しい。グリッドなど初めからある程度の方法を提供しておくことで居住者自身で手軽に自由を再現可能になる。
- どのトキも居住者の意思を反映する為、スラブの上に乗るものはすべて取り外し可能。次の住民もその次の住民も容易に意思を反映することができる。
- 住民の縦へ横への動きが建物のもつエネルギーを増大させる。A・B棟3層メゾネット C棟2層メゾネットに。住民は日常の中で重なり合う。

● “住まう”の提案 住棟配置

集合住宅として共生する住民間のつながりは不可欠である。



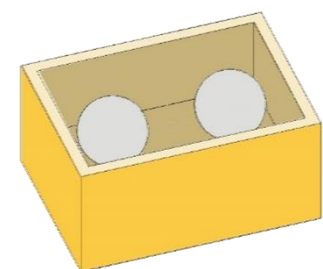
- 住棟を3棟に分割それを積み上げ、ずれを生む。ずれによってつくられたA・B棟の上部はC棟の住民の動線の役割を持つ。他の住民も過ごせる空間とし義務感なく人が交わるポテンシャルを付与する。
- 柱とスラブの単純な構造は起こりうる上への成長を可能にする。

● “住まう”の提案 個と接続空間

1 個の明確なアイデンティティ空間の確保

最小限空間のカプセルを**アイデンティティ個室N**として用いる。
物理的に分離されることで自分や相手の存在を意識する。

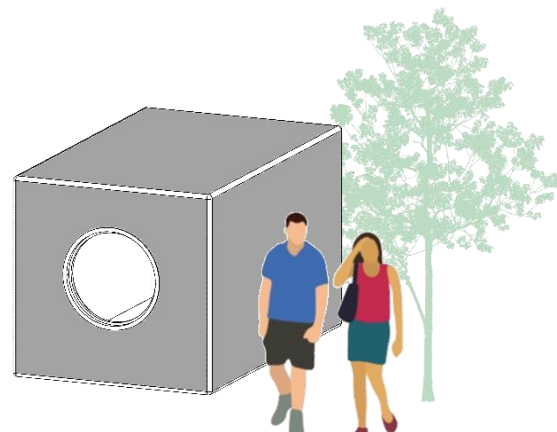
2 分離した個をつなぐ柔軟な空間



脅迫的な接続



柔軟な接続

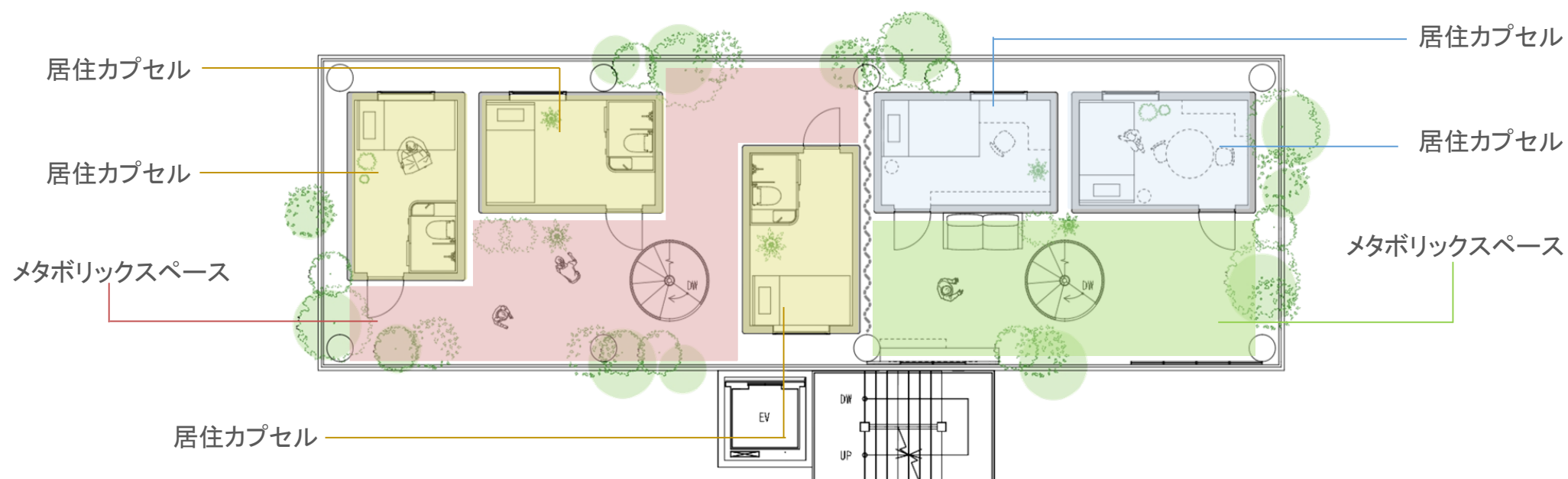


メタボリックスペース

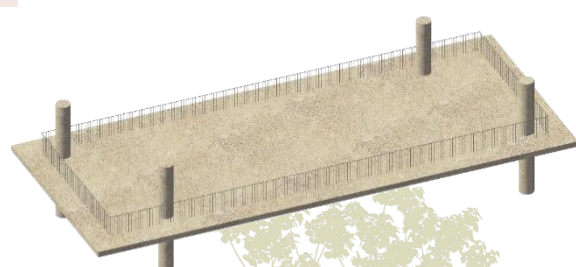
個を配置した間の代謝する接続空間。
住民を写像する空間。明確な殻を纏った個の個人化を孤立化へ変化させない役割を持つ。
代謝(メタボリック)=柔軟性

メタボリックスペースに暗黙の脅迫感は生ませない。接続空間に**廊下と食事**という生活行為をもたせる。

“交わる”という名もなき行為はほかの生活行為の**おまけ**となる。

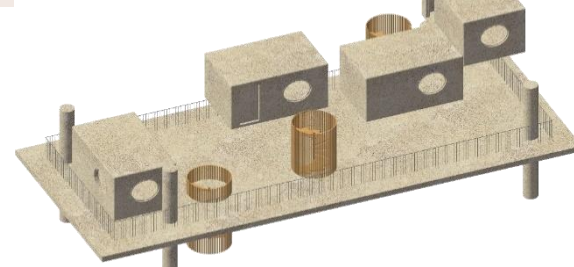


1 土台



居住者が作り出すものに影響は与えない

2 カプセルの配置



居住者は一定のルールに沿ってカプセルを配置していく

3 メタボリックスペースの発現



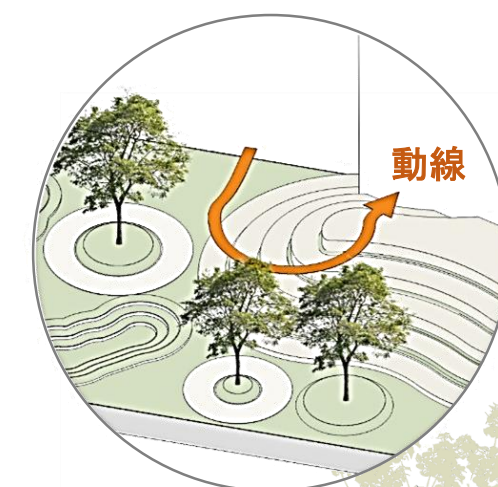
生活がナチュラルに自分色に染まる



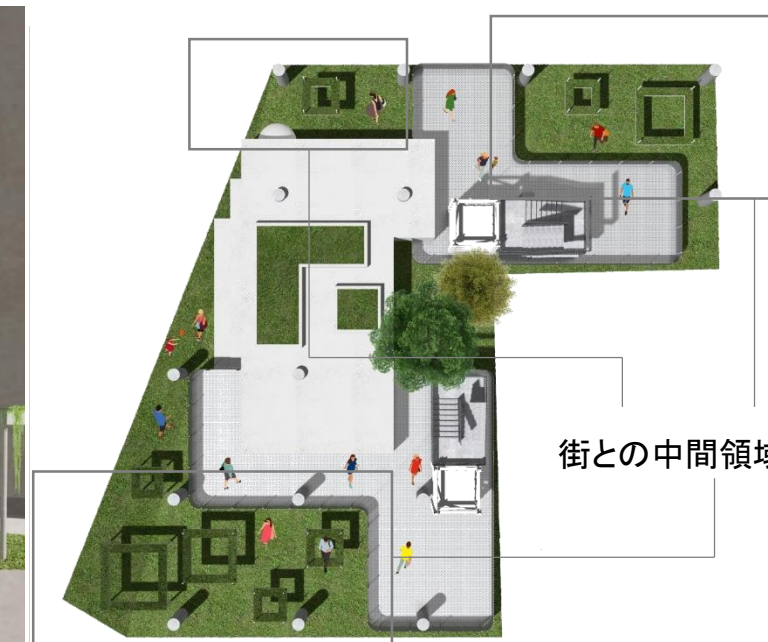
● “住まう”の提案 中間領域の役割

中層階は住民の動線の役割を担いながら人が交わるポテンシャルを持つ。

中層部イメージ



エントランスイメージ



街との中間領域

● “住まう”の提案
メゾネット生活イメージ



居住層のカプセル配置（間取り）及び住戸の区切りは一例である。
設備カプセルを持たない世帯の居住者は設備階の共有空間に階段を
繋げ出入りを行う。

設備層と居住層を分けることに加えて、必要設備をキッチンカプセル
とサニタリーカプセルの2つにまとめ単純化を図る。これにより更新を
よりスムーズにする。

